



コロナ 接種伸び悩む

オミクロン対応型済んだ人 16%

新型コロナウイルスの感染者が増え、「第8波」の指摘もある中、ワクチン接種が伸び悩んでいる。接種間隔が3カ月に短縮されて1ヶ月が過ぎたが、オミクロン株に対する接種への呼びかけは、浸透していないのが現状だ。

(神戸市美玲・枝松祐樹・編集委員・田村達一)

「冬は実験や感染者など、国民の皆さんそれぞれにとって大切な時期。ワクチン接種を前向きに受けただき、大事な人を守り、自分自身を守ることにつなげていただきたいと心から願っています」

岸田文雄首相は25日、自衛隊の大規模接種会場でオミクロン型のワクチンをうつ、記者団に話した。

政府はテレビCMやSNSなどを通じ、ワクチンのPRに力を入れる。

オミクロン型の接種は9月20日に始まり、政府は多くの国民が年内にうてるよう、10月21には接種間隔を5カ月から3カ月に短縮した。10~11月に1日100万回を超える接種が可能な体制を整えるとして、10月を最大接種回数に設定する。

ただ、1日平均の接種回数は11月16日の週で約60万回。前々週は約44万回で、感染者数の増加に伴って増えつつあり、24日時点でオミクロン型の1日の最大接種回数は1日最大168万回の接種体制を確保した。

だが、1日平均の接種回数は11月16日の週で約60万回。前々週は約44万回で、感染者数の増加に伴って増えつつあり、24日時点でオミクロン型の1日の最大接種回数は1日最大168万回の接種体制を確保した。

月末に1日最大168万回の接種体制を確保した。

接種対象(12歳以上)人口の約半数。高齢者の1/3回目接種率(9割)をもとにして、高齢者の8割が年内にオミクロン型をうつと想定すると、現役世代の接種率は35%程度になるとまる。

種実績は84万回になったが、接種率は全人口の15.5%で、政府のねらいどおりとは言いがたい。

「BQ.1.1」の感染を防ぐため、ワクチン接種も示されたという。

ただ、接種によって感染リスクが進んでも、年内にオミクロン型をうつ終えられるのは約5600万人で、それを両社とも明らかにしない。

「BQ.1.1」の感染を防ぐため、ワクチン接種も示されたという。

ただ、接種によって感染リスクが進んでも、年内にオミクロン型をうつ終えられるのは約5600万人で、それを両社とも明らかにしない。

者との割合を実際にどれほど下げられるかといったデータは、両社とも明らかにしない。

オミクロン株による感染リスクを防ぐため、ワクチン接種をより効果的に行なうことがわかった。しかし、ワクチン接種を防ぐ効果は、接種から3カ月ほどたつと大きく下がってしまうことがわかっている。重症化を防ぐ効果はより長く続くものの、接種から半年ほど過ぎるとやはり効果は下がるとされる。

ワクチンに詳しい北里大学ウイルス学(中山哲夫・特任教授(臨床ウイルス学))は、「第8波の規模をできるだけ抑え、自身と周囲の人を守るために、なるべく早く、オミクロン株対応ワクチンを接種してほしい」と語る。

「効果や副反応 具体的に発信を」

なぜ接種率は政府が思うように上がらないのか。

東京都が10月に20~70代の1千人に実施したアンケートでは、1~2回を接種した1~23人のうち、3回目を「絶対に接種しない」「おそらく接種しない」と答えた人は58%だった。理由は「副作用がつらかった」が最も多く35%、次いで「効果が弱い」が31%だった。

リスクコミュニケーションに詳しい広瀬弘志・東京女子大名誉教授(災害リスク学)は「効果や副反応について正確かつ具体的に発信し、ネットなどで誤っている情報があれば訂正することが、接種への納得感を高めることが、理解につながる」と話す。そのうえで、「社会経済を回すこと

間隔空くと効果低下

オミクロン型ワクチンには、「BA.1」というタイプ(系統)に対応するものと、「BA.4」と「BA.5」の系統に対応するもの2種類ある。現在、国内で流行の主流はBA.5系統だ。

BA.5型は、当初はマウスでの実験データしかなかったが、人間での効果を

調べた臨床試験のデータが最近、公表され始めた。米ファイザー社は、4回目接種にBA.5型をつづけた56歳以上の人で「BA.5系統などへの感染を防ぐ【中和抗体】の増え方が、従来型ワクチンの約4倍にのぼった」と発表。米モデルナ社も同様の19~89歳の成人で「中和抗体の増え方が、従来

の約4倍にのぼった」と発表。米モデルナ社も同様の19~89歳の成人で「中和抗体の増え方が、従来

の約4倍にのぼった」と発表。米モデルナ社も同様の19~89歳の成人で「中和抗体の増え方が、従来